

*Kappa Novels*



お願い——

この本をお読みになって、どんな感想をもたれたでしょうか。「読後の感想」を左記あてにお送りいただけます。ありがとうございました。なお、このほかに、「カッパの本」では、どんな本を読まれたでしょうか。どの本にも、一字でも誤植がないようにつとめておりますが、もしお気づきの点がありましたら、お教えください。ご職業、ご年齢などもお書きそえくだされば、幸せに存じます。

東京都文京区音羽二の十二の十三

(郵便番号112)

光文社 出版局

長編小説 <sup>の</sup>乗 <sup>と</sup>取 <sup>り</sup>

昭和35年9月10日 初版発行

昭和49年5月25日 50版発行

著 者 <sup>しろ</sup>城 <sup>やま</sup>山 <sup>さぶ</sup>三 <sup>ろう</sup>郎  
神奈川県茅ヶ崎市東海岸  
北4-3-12

発行者 五十嵐勝彌

印刷者 堀内文治郎  
東京都千代田区三崎町2-18-11  
堀内印刷

発行所 東京都文京区音羽2 株式会社 光文社  
振替東京115347 電話 東京(942) 2241 (代)

落丁本・乱丁本は本社でお取替いたします。(関川製本)

表紙の模様・意匠登録 116613 © Saburō Siroyama 1960

(分)0-2-93(製)02010(出)2271(0)

長編小説

# 乗 取 り

のっ

と

城山三郎

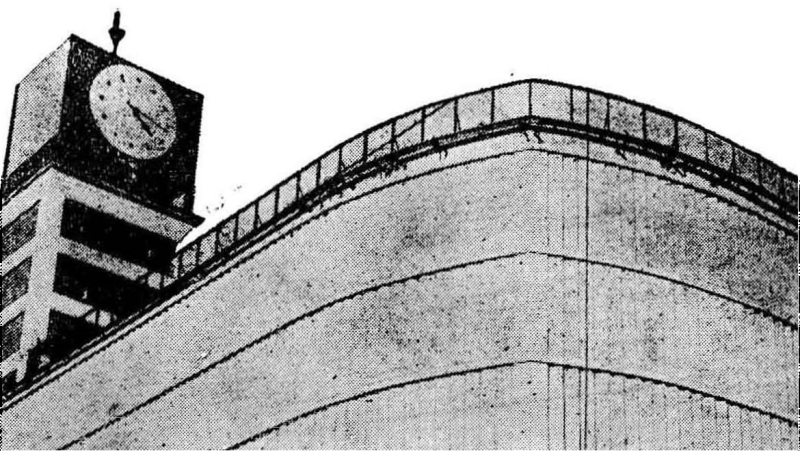


カッパ・ノベルス



# 目次

|   |                                |     |
|---|--------------------------------|-----|
| 一 | あの男                            | 5   |
| 二 | 頭取室<br><small>とうどりしつ</small>   | 37  |
| 三 | 仲介者                            | 60  |
| 四 | 社長の椅子                          | 82  |
| 五 | 青井文麿<br><small>あおいふみまろ</small> | 99  |
| 六 | 副委員長                           | 117 |
| 七 | 飯処分                            | 138 |
| 八 | 財界                             | 164 |
| 九 | 孤立                             | 195 |
| 十 | 雨                              | 226 |



写真構成 光文社写真部

## 一 あ の 男

酒のつきそろうのを待って、一同、盃をあげようとしたとき、花火が鳴った。夏の夜空にまるく余韻を残して、一発、二発。フーツとだれかが嘆息をもらした。

「縁起がいい」

労務担当重役の辻が、陽やけした頬をほころばせて言い、

「さ、おめでとうございます」

と、盃のリードをとった。

重役たち、それに従業員組合代表の小久島と笹崎も、あわてて、

「おめでとうございます」

と、盃をそろえた。

社長の野々山は、白い盃の花びらの中で、顔中の筋肉をゆるめて笑った。

「いやあ、おめでとう。諸君たちのおかげだ」

盃をかかげたまま、豊かなあごを泳がせて一同を見回し、それから、いかにもうまそうに咽喉をしめらせ

た。

「いつものことながら、社長のおかげです。従業員を代表しまして、心よりお礼を……」

組合委員長の小久島が、女のように甲高く、よく透る声で言いながら、頭を下げる。

「お礼なんて、きみ……」

野々山はそう言いながらも、ホッホッと煙でも吐き出すように笑った。

「だれのおかげでもありやしない。地の利、人の和は、わが明石屋デパート伝統の宝である。人の和を第一と考える以上、わが明石屋に労使間のトラブルが存在するはずはない」

辻が演説口調をつくって言い、

「……というのは、社長年来の持論なんだから、今さら事あたらしくは……」

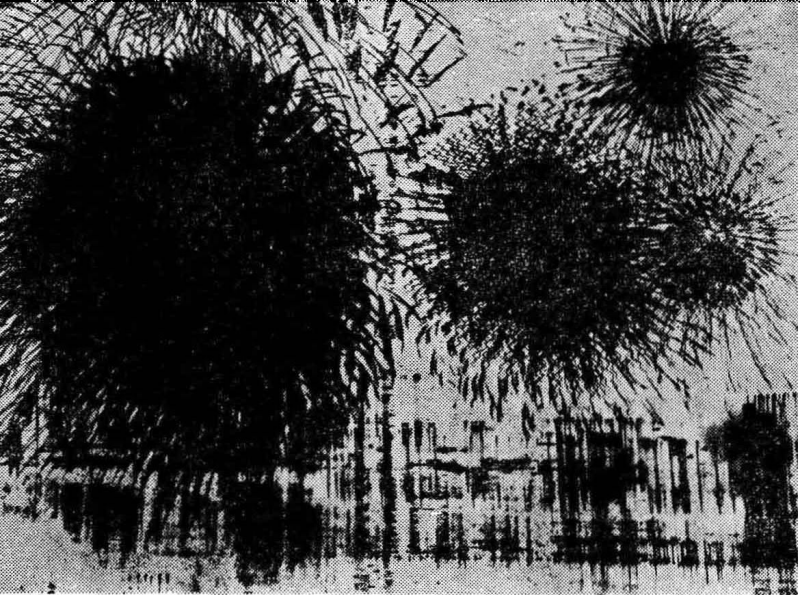
野々山の満足そうな顔つきをたしかめるように見た。小久島がことばをつづけた。

「いや。正直に申しまして、じっさい、わたしども執行部は助かります。世間さまの目には、うちの組合は相当、戦闘的にうつっているようなんですが、内実は、こんな具合によく理解していただいて……」

「小久島君、嘘をつくなよ。明石屋の組合ほど甘やかされてる組合はない、というのが世間の評判だよ」  
辻がふざけ半分に腰を浮かせてたしなめる様子に、重役たちは笑った。

小久島は相変わらずまじめくさった顔つきのまま、頭をかき、

「まったくそうなんです。戦闘的といい、甘やかされてるというのも、けっきょくは同じことなんですからな」



#### 多摩川の花火

へまた、見えすいた茶番を……」

副委員長の笹崎は、小久島の顔が見ていられず、視線を落とした。

戦闘的であったのは、組合結成一、二年のことで、このごろは、労使双方が一步も退かれぬ要求に立って激突し合うというようなことは一度もなく、のりくりりと馴れ合いのような交渉ばかりである。今度も、八百円のベース・アップ要求が四百三十円の線で妥結し、同種企業中では、相変わらず最下位の水準にとどまることになった。かけ離れて低くならない程度で、妥結しているのだ。明石の営業成績が、他のデパートにくらべて不振をつづけていることは、従業員にもわかっていた。わかっているからこそ、ほどほどのところで妥協し合うのだという感じであった。組合も無理を言わないし、会社側も従業員たちに格別の奮起を求めはしない。まあお互いに不満ながらも、よろしくやろうじゃないか——そういう空気があった。

のれん大事との親の頼みで家業を継いだのだが、息子にはもともとやる気はない。気ままに仕事には無気力——そうした息子に対し、親は意にそわぬ仕事を押しつけたのだからと気がねしてとがめもしない。そのくせ、店のうまく行かないのは、息子の責任だと思っている。息子は息子で、もともと自分は不満なのだからと、責任を考えようとはしない。こうして、のれんこそかけてはいるが、親子ともども活路をなくして行くようなやり切れないさが、笹崎には感じられるのだ。

「さあ、きみたち。そんな堅くしていないで、どんどん飲みたまえ」

専務の天野の声に、女たちの白い腕が左右からのびて盃をふさぎにかかった。

「あ、ぼくはビールに……」

笹崎はあわてて盃を伏せた。内証ないじょうしているやり切れなさだけで、体の芯こゝろまで熱かった。

献杯けんぱいも済まぬうちに、ひとりビールをのみ出した笹崎を、辻は斜め前から鋭い目で見て、

「好きなようにやりたまえ。今夜は、恒例の団交妥結の手打ちばかりじゃない。もっと、めでたい夜だからな」

ふくんだ言い方なのだが、女将おかみがひきずられるように、

「おめでたいって、何でございますの」

「うちの店の女の子が、全国優勝、日本一になったんだ」

「おやまあ、日本一ですって。それは、おめでとうございます。……でも何で優勝なさいましたの」「水泳です。全国の勤労者水上大会で女子部が優勝したんです」

笹崎が、事務的な口調で答えた。

「ほう。水泳で……明石屋さんの女店員さんたちが水泳で優勝なさったの」

女将は、その座の女たちに聞かせるように言い、小首を歳不相応にかしげると、

「あんな街の中で、どうやって稽古なさいました？　まさか、日本橋のあの川で……。いくら日本橋の明石屋さんでもねえ」

笑いながらも、日本橋に力をこめて言う。客たちの心理を心得切っている。

空が斜めに明かるくなり、花火がまた鳴った。

「幸先がいい。いまに、うちの売上げも日本一、全国優勝になりますぞ」

辻のことは耳に、どの顔も夜空を見上げていた。

多摩川堤で花火大会でもあるのであろう。花火は消えかかる後を追って次々と夜空に炸裂した。白、黄、赤、うす紅、水色と、大輪の花々が、黒い都会の空に、しばらく乱れ咲きをつづける。そのたびに、涼しい風が明け放たれた空いっぱい流れに流れてきた。

「ほんとうに、きれいですこと」

女の一人が、あえぐようにいった。

社長の野々山をはじめ、重役たちも、無心に空を見上げている。しばらくは無心になり切れる解放感のようなものが、どの顔にも溢れていた。

花火が切れると、小久島がすかさず感嘆した声を立てた。

「すばらしい夜ですなあ」

「そうだよ、きみ。すばらしい夜なんだ」

辻が、かぶせるように言う。

「水泳で優勝とはねえ……」

女将は、まだ水泳にこだわっている。

「ほんとなんだよ。今度は優勝旗を持って来てやるか」

「いや。それより、そんな立派な女店員さんの泳ぎぶりが見たいわ」

女将の口調には、まだ疑いがこもっていた。辻は、そうした女将に突っかかるように、

「な、うちには、こんな立派な女の子がいる。立派な女の子ぞろいだ。……ところが、一昔前にはどうだ。世

間じゃ、とんでもないことを言うのがいたな」

座は、ふっと静まった。

数年も前のことであったが、明石屋の女店員の中で売春する者があるとのスキャンダルが流されたことがあった。興味本位の軟派紙の記事であり、そうしたスキャンダルは明石屋に限ったことではなかったが、明石屋の関係者の身にこたえた。デパートとしては、女店員の不評は、商品の不評以上に客足にひびくからである。考えようによっては、同業者が金をつかって、その軟派紙に書かせたようにも見える。スキャンダルの出所も曖昧であった。明石屋側は、黙殺することにした。

すると、その軟派紙は図に乗ったように、二度三度と、似かよった記事を重ねた。アルサロなどの生まれた

時代で、読者受けするスキャンダルであった。従業員組合が騒ぎ、それにひきずられて、会社側も動き出したが、すでに活字に乗ってひろげられた後では、どうしようもなかった。

「明石屋だから、あんなスキャンダルを書かれたのだ」という人もいた。三越・高島屋などのように基礎も堅く給与もよく、いわば一分のすきもないデパート相手では、スキャンダルの方がいかにもつくりものらしく見えてしまうし、戦後派の一群のデパートのように財界の裏街道にも通じた実力者が経営していれば、軟派紙ごときは事前に手玉にとって、刃の方向を変えさせるだろうというのである。とすれば、明石屋には狙われるだけのすきがあったとも言える。

事実、明石屋自体にも問題があった。明石屋の中にはキャバレーも開かれていたし、接収がながびいて立ち直りが遅れたせいもあって、給与ベースも低く、規律も確立されていなかった。そうしたスキャンダルをもっともらしくさせた雰囲気のようなものがあったのだ。

いずれにせよ、いまわしいできごとであった。そのことは、社長も従業員も、株主も、年来の顧客たちも、また日本橋かいわいの人たちも、いまだに忘れてはいない。辻のことは、たちまち座の空気がしらけたのも、そのためであった。

だが、もっと、やりきれないのは、それだけの傷痕が、いつまでも思い出の中に残っていることなのだ。傷痕をおおい消してしまうような、たくましい肉の盛り上がりが一向にない。印象に残るような華々しい売出しもなければ、関係者たちの心を一新させるような企画もなかった。些細な傷痕がいつまでもうじうじとして残っているような状態こそ、咎められねばならぬことかもしれない。

こわばった空気をあざ笑うように、花火が空に抜ける高い音を立てて散った。

その音のまだ消えぬうちに、辻が自分のことばをとりつくろうように、女將に話しかけた。

「そんなことより、いちばん、おめでたいのはもっと別のことなんだ」

「おや、おや、まだおめでたいことがございますの」

女將は、しなをつくりながら、大仰に驚いて見せた。

「しかし、まあ、これは言わないでおこう」

女將の目くばせに、社長の脇にいた若い妓が、はじかれるように声を立てた。

「あら、それは卑怯よ。いったんおっしゃっておいて……。ねえ、おっしゃってよ」

野々山と辻に、半々に流し目を送る。

「いや、言えないよ。これは明石屋の最高秘密だから」

「ひどいわ。けっして他言しないから。教えて……。ほら、げんまんするわ」

妓は別に知りたくもない。ただ、その場の空気を解きほぐそうと声をはずませているのだ。

「そんなに知りたいのか」

「ええ」

「あやしいぞ。どこから頼まれて、スパイしとるのと違うか」

「あら、いやだ」

膝をのり出す妓の先をさえぎるようにして、社長と並んでいた南川がとつぜん、口を開いた。

「最高秘密が知らぬが、けっこう、市場の材料になつてゐるじゃないか」

ことばはやわらかいが、たしなめるような響きがあった。

南川は大亜生命の社長であるが、大亜生命が明石屋の大株主であるところから、頼まれて非常勤取締役に名を連ねている。大学では社長の野々山の一年先輩であり、野々山は、会長とはいふもののめったに顔を見せぬ塩沢よりも尊敬し、親しく相談のつてもらっている相手であつた。温厚な人がらなのだが、そのことばは重役たちには決定的な重さで響いてくる。

「そういえば、この二、三日、うちの株への買気がめつきり強くなつてきましたな」

天野専務が首すじを拭いながら言つた。

「けっこうですわ。株があがるのは商売繁昌のしるしですもの。やっぱり、おめでたいことがあるのですね」  
南川の語調におもねるように、女将も低い声で言つた。

「けっこうかどうか……。ねえ、野々山君」

南川は目だけで笑つて、野々山の方を見た。

社長の野々山は、ちよつととまどつたような表情をしていたが、盃の酒を口にふくみ終わると、

「また、例の男ですか」

辻がはれぼつたい目をいっばいに見開いた。

「例の男というと、あの青井ですか」

南川も野々山も答えない。花火は終わったのか、静まった頭上で、軒端の釣忍に下げた風鈴が細かな音を立

てた。目黒の坂上にあるその料亭は、風通しもよく、床の間の扇風機も止めてあるほどなのに、問題が問題だけに、熱い空気の壁に立ちふさがれたようにだれの口もつぐんでしまう。うかつに話せないという気分もあった。

「あの男なら、ニュースをつかまえることは早いからね」

野々山が淡々として言った。

「油断がならんよ。……土地がはいると知った上での買いだ。ただの利食いだと思っていると、不覚をとるかもしれない」

「しかし、あの男が……」

「わからん。いまのところ買占めの力はない。だが、何でもやりかねない男だ。あの男のやり口を見ていると……」

野々山は話の先をそらすように、

「今度の土地では苦労しましたからなあ。足かけ三年ですよ。これどうやくほつとしたところなのに……」

明石屋デパートでは、かねがね増築の計画があり、北に隣接する土地約四百坪の買収を進めていた。その九分通りが片づいたのに、ただ一軒、古くからの海苔問屋である川文だけが動こうとしなかった。江戸開府のとき以来、代々住みついた日本橋の土地を離れられないというのである。立ち退いてもらった他の店々にもやはりそれと同じ意識はあったが、最後には話し合いがついた。だが川文だけは、たとえ坪何百万と積まれようと動きたくないというのだ。それは無理もない話であった。「日本橋の川文」ということで、一つの商品銘柄の

ようにもなっていたからである。

野々山たちは、この一軒のために日本橋かいわいに換地探しをつづけねばならなかった。予算以上の出資であつたが最近になつて川文も氣に入る換地がようやく見つかり、四百坪の増築用地を確保することができた。正直なところ、おめでたいというには余りにもおそ過ぎた。他のデパートが軒なみ増改築工事を進めた後である。さらに悪いことには、明石屋ではその四百坪の増築を待つて冷房装置もとりつける予定であつたため、夏場にはいると、いっそう客足を奪われていた。

土地がいれば増築、冷房、そして新装大売出しと、一挙におくれをとりもどそう。——明石屋の経営陣はそう考えている。

だが、このことは裏返せば、土地がいらないのだから、冷房もできぬ、派手な売出しの要もない……等々と、無為無策に近い消極策を正当化させる弁明にもなつていた。

ともあれ、土地がいつたことは、野々山の感懐どおり、明石屋の経営陣にとって癌をとりぞいた思いであり、心底からほっとくつろいだ氣分を与えていた。そこを狙つて、株の買氣が強まるとは……。

「しかし、目のはいい男ですな」

委員長の小久島が、だれにともなく言った。

「当たり前だ。はやくも何もありません。今こそ明石屋発展のチャンスだからな。川文の土地のことさえ氣づけば、だれだって買ひに出るよ」

「その土地のことを知っている点、目はいいじゃありませんか。まだ従業員のほとんどが知らない状態ですか